

## リレーコラム 9 把手のない扉

藤井容子

(ライター／京都岡崎魅力づくり推進協議会 魅力情報発信担当マネージャー)

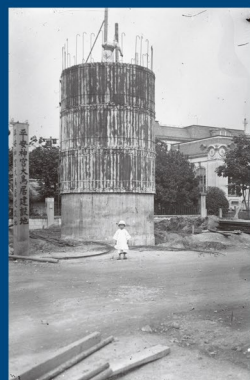
住んではないが、この地域の“活性化”にかかわりはじめて7年、それなりに町に親しくなってきた。とくに担当分野が“魅力情報発信”なものだから、土地と営みの起源と変遷を探るクロニクル本『地図で読む 京都・岡崎年代史』を編集したり、多少マニアックなまち歩きを企画したりと、地域のトボスをめぐって地面から岡崎を見てきた。そこへ持ち前の天邪鬼根性が加わって、この大物揃いの岡崎のなかで、いま埋もれかけた小さなものが愛おしい。

前号のリレーコラムで奈良文化財研究所の恵谷浩子氏も言及していたとおり、岡崎の空は広い。そして水と緑が多い。現在の岡崎は琵琶湖疏水の印象が強いが、もともとここは白川(白河)のテリトリーである。白川は今でこそ祇園へ流れてしゃらしゃらと穏やかな小川だが、まだ人もいなかった昔から長らく氾濫を繰り返す暴れ川として度々の土石流でこの地を襲ってきた。その堆積でできた扇状地に今の岡崎があり、広い平地が大区画で反復利用されてきた結果、京都国立近代美術館をはじめ、京都市立図書館、京都市美術館、平安神宮、ロームシアター京都(京都会館)、京都市動物園と、なみいる巨艦がこの地を華々しく彩り、おかげで空は変わらず広い。

南禅寺、金戒光明寺、岡崎神社、聖護院、青蓮院などの寺社をのぞき、こうした大型施設の多くは明治・大正・昭和初期の大博覧会時代を直接間接のルーツとする。琵琶湖疏水の開削後、近代京都の蘇生を象徴する場所として、また大型開発の可能な郊外の余地として重宝された岡崎では、明治28年の第四回内国勧業博覧会、平安神宮創建と平安遷都千百年祈念祭を皮切りに、多くの博覧会が開催された。そのときに動物を展示した動物館が祖となって動物園ができ、海外輸出を見込んだ美術工芸品の展示施設が勧業館や美術館になっていったのである。今や洛東のランドマークとなった平安神宮大鳥居も、昭和天皇即位を記念して平安講社によって計画され、昭和3年に岡崎等で開催された大礼記念京都大博覧会の翌年に完成した。

その巨大な鳥居の柱の足元に、小さな扉がついているのをご存知だろうか。把手がなく、やや宙に浮いたような不思議な扉の正体は、中空になった柱の内部への出入り口である。神宮道を横断して鳥居の中を向こう側まで通り抜けるメンテナンス通路となっているのだ。たしかに左右どちらの柱にも同様の扉があり、聞けば年一回の点検を行っているという。だが、ここに人が出入りしている情景を一度も見ることがない。この鳥居は、鉄筋コンクリート造の大型建造物のさきがけとして昭和3年から4年にかけて建設された。設計は京都府技師の阪谷良之進、構造設計は京都帝国大学助教授の坂静雄で、同教授で建築家の武田五一が顧問をつとめ、施工は大林組が請け負った。平成14年に国の登録有形文化財に指定されている。把手のない扉を前に、造営時の夢や希望や辛苦や悲哀を思う。90年近くにわたり人知れず手入れを重ねてきた営みを思う。昼と夜の間に黄昏と彼誰があるように、生活も文化も漂白しきれものではなからうに。だからこうしたひっそりしたもの、隠されたもの、忘れられたものが気にかかる。

西の柱は、京都国立近代美術館の眼前にある。同館4階の東側、神宮道に面した窓から一望できる広い空や眺めとともに一顧されたい岡崎の歴象である。



建設中の大鳥居。写真は西柱。右奥に武田五一が設計した京都市立図書館の姿が垣間見える。昭和3年撮影。平安神宮所蔵

京都国立近代美術館賛助会員

特別会員 **木下グループ** | **FUJIFILM**

一般会員 **ワコール** | **中央信用金庫** | **KYOCERA**

当館は上記の賛助会員の皆様からご支援、ご支持をいただいております。

2017年12月13日 発行 視る491号

編集・発行 | 京都国立近代美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎門勝寺町 電話 | (075)761-4111(代表)

編集協力 | 株式会社福本事務所

組版フォーマット設計・表紙デザイン | 大西正一 印刷 | 野崎印刷紙業株式会社

表紙 | 並河靖之《藤園花瓶》明治～大正時代 京都国立近代美術館蔵(撮影・木村羊一)